

The White Peacock 試論

—— Cyril を視点とする主題解釈 ——

鈴木俊次

序)

The White Peacock は、所謂、天才と称される作家の処女作がもつ特質を良い意味にしる悪い意味にしる備えた作品である。例えば、この小説の各所に散在する、場合によっては過剰とも思われる詩的散文ともいえる自然描写は、一方では読者を魅了する要因でありながら、一個の小説作品としての構成面からみた場合、プロット展開の流れを阻害するネックとなっている事も見逃せない事実である。またこの作品は、プロット構成のまずさ、その一因となっている Cyril による一人称形式の破綻、性格描写の不十分さ等々の批評が目立ち、それ故、*Sons and Lovers*, *The Rainbow*, *Women in Love*, といったロレンスの代表作と比べた場合、作品自体としての *The White Peacock* 解明が十分なされているとはいえない。¹⁾ そこで、この小論においては Cyril に視点を置きながら、この作品の主題解釈を試みたいと思う。

一般に若き日のロレンスその人と考えられる Cyril は、時には語り手になり、時に登場人物としてプロットに参加するため、各所で矛盾を露呈している。²⁾ このためこの人物には従来十分な注目が払われて来たとは云い難い。この小説では、なるほどプロット構成においては George と Lettie, Lettie と Leslie, George と Meg というように Lettie と George が中心となって展開されている。しかしながら、筆者が当面注目したいのは、こうした表面上のプロットによる主題構成ではなく、そうした表層の主題の裏に潜む、半ば作者の無意識的意図により構成される深層の主題とでも称すべきものである。その場合、Cyril という人物は作者と一体化される人物である故に一層重視され

てくるのである。

作品の中に半ば無意識的に描き出されている深層の主題に注目する場合、我々は必然的に、象徴なりイメージなりに着目しなければならないであろう。既にこの *The White Peacock* を書く時点で、ロレンスが十九世紀的なプロットを中心とする小説構成を否定する言葉を当時彼の恋人であり、文学上の相談相手であった Jessie Chambers に語っている事は興味深い。³⁾ ロレンスがシンボリズムの機能について比較的早くから意識的であった事は注意されてよいであろうし⁴⁾、この小説の題名そのものが既に象徴であるといえる。

1) Nethermere からの離脱——George と Lettie——

The White Peacock は当初 *Laetitia* (ラテン語、「歓喜」の意味)、次いで *Nethermere* という題名が付けられていた。この点からも暗示されるように、この小説の主な背景となる Nethermere の自然はこの作品の深層主題を解明する上で、peacock の象徴と結びついて重要な意味を持って来る。主な登場人物、農夫 George 及びその家族である Saxton 一家、森番 Annable, Lettie そして Cyril 達はいずれも Nethermere の自然と深い関りを持っている点にまず注目しなければならない。この作品は三部から成っているが、登場人物達の青春期における平板な葛藤を描く第一部、及び Annable の登場する第二部において Nethermere は単に物語の背景として以上の意味を帯びている。第一部第一章 ‘The People of Nethermere’ では、これらの登場人物達が Nethermere の自然にはぐくまれる様が描かれている。彼らを受けとめ抱いてくれる “bosom of the wood” (p.6) を持つ、また Saxton 一家の住む Strelley Mill 農場から流れ出る小川を静かに “receive” する Nethermere の湖 (p.10)。Nethermere の自然とは彼らを静かに受けとめ、はぐくんでくれる母の役割を、もっと極言すれば womb そのものを象徴している。⁵⁾ ここから Nethermere の象徴としての二重性が生じてくる。即ち、womb というものの有する本源的な生命力の象徴としての意味と、ロレンスが *Sons*

and Lovers の中で明確にして行ったあの母親というものが息子に対して本能的に有する盲目的で支配的な *Magna Mater* 的女性の特質である。この二重の意味と *George, Lettie, Cyril* の関りこそ深層の主題を構成する要素なのである。

この小説が書かれた時期についてロレンスは1908年の書簡で次のように述べている。

...*Laeitia* was written during the year that I changed from boyhood to manhood, my first year in College. It is a frightful experience to grow up, I think, it hurts horribly;... As a matter of fact, most folks are afraid to grow up; that's why they defer it so long.⁶⁾

これからもわかるように、*The White Peacock* は作者自身の“boyhood”から“manhood”への成長にもなう多感な青年の不安と哀歎の心情を反映している事は明らかである。と云うのも、この作品を結論的に概括してしまえば *Nethermere* の中で育った登場人物達が成人して次第に *Nethermere* から離れてゆく過程が描かれているといえるからである。それ故この小説の冒頭に表現される *Nethermere* の自然は必ずしも明るいものとなっていない。

I stood watching the shadowy fish slide through the gloom of the millpond. They were grey, descendants of the silvery things that had darted away from the monks, in the young days when the valley was lusty.... The thick-piled trees on the far shore were too dark and sober to dally with the sun; the weeds stood crowded and motionless. (p. 1)

“shadowy”, “gloom”, “grey”, “dark”, “sober”, “motionless” といった形容詞は *Nethermere* の今後の宿命を暗示し、この小説全体の色調ともなっていると思われる。それは一見牧歌的とも思われる *Nethermere* の自然が単に地上楽園の意味のみを有するものではない事を示している。やはりこの一節に着目する *Keith Alldritt* は魚、木、小川といったもの総てがこの小説の

主題ともいうべき “a process of stagnation and decay” の証拠となり、この原理は自然界の生物だけでなく人間にも適用されていく、という興味ある解釈を示す。⁷⁾ 以下この方向から Nethermere 及びそこに関する George, Lettie の運命を簡単に辿ってみよう。

物語の前半、第一部、第二部において描かれる若き George は男性的肉体美を備え、“tenderness” と “animal vigour” をもつ自然児、云わば母なる Nethermere の生命力を受け継ぐ農夫である。他面、現代人としての教養を身につけた Lettie や Cyril から見ると George は “child” (p. 25) であり “stalled ox”(p.15)にすぎず、Cyril に云わせれば、“Your life is nothing else but a doss.” (p.1) である。しかしながら、Cyril も Lettie もこうした自然児としての George に魅力を感じているのであり、彼らが George の精神的「眠り」を覚醒させたのである。こうして George は Nethermere の外側の社会に生活する事になる。⁸⁾

George の迎える道は Lettie との関係の失敗、Lettie とは対象的な居酒屋の娘 Meg との結婚生活の失敗、社会生活に順応できず酒に溺れて廃人同様の結末を迎えるという典型的な「墮落」のパターンを描いている。それは彼が Nethermere から離脱して、自然児として生きる道を断った結果である。逆に George は Nethermere という母胎から独立し得るだけの成長した自我を持っていなかったともいえる。いずれにしろ George にとって Nethermere 以外の世界は不安な未知の世界なのである。

He was afraid of the town. He was afraid to venture into the foreign places of life, and all was foreign save the valley of Nethermere. (p.234)

George はこの “foreign” な世界で破滅を迎えた後、妹 Emily 夫婦の農場で療養している。彼は大地に生きるべき男であったのである。

次に Lettie について考えてみよう。この小説の初めの題名 Laetitia という語と Lettie という固有名詞の発音の類似は明白である。つまり、後で明ら

かにしていくように、Laetitia-Nethermere-the White Peacock-Lettie という一連の結びつきが考えられる。Lettie は一面でこうした peacock の象徴と結びつくに相応した華やかさと教養を備えた女性である。そこに George は自己を導いてくれる “light” としての彼女に憧れる、換言すれば、“child” としての George には “mother” としての Lettie が必要だったと云えよう。Nethermere の母性象徴—Lettie という結びつきがまず明らかとなる。

Lettie が “white peacock” の象徴に直接結びついてくる事は各所に示されているが、もっとも明瞭な場面を引用してみよう。

Leslie knelt down at her feet. She shook the hood back from her head, and her ornaments sparkled in the moonlight. Her face with its whiteness and its shadows was full of fascination, and in their dark recesses her eyes thrilled George with hidden magic... As she turned laughing to the two men, she let her cloak slide over her white shoulder and fall with silk splendour of peacock's gorgeous blue over the arm of the large settee. There she stood, with her white hand upon the peacock of her cloak, where it tumbled against her dull orange dress... (p.251)

“moonlight” の下で自らの優美さを男達に誇示する姿、月光に包まれて “whitemess” そのものと化したような Lettie の姿。こうした姿は第一部第五章 ‘The Scent of Blood’ で恍惚のうちに「月光」に反応する Lettie の姿と重って、⁹⁾ 後に考察する教会の境内における Peacock の姿と一体化している。Lettie に結びつくイメージとは、青白い “moonlight”, “white clothes”, “white violet” (p.160), “white swans” (p.303), “Salome” (p.158) といったものである。“white” な色彩は「生を否定」する象徴としてロレンスが嫌った色彩である。これらのイメージはほぼ Peacock イメージと同様に、女性的イメージとしての華やかさ、優美さ、冷たさの情感を抱かせる。

さて Lettie は、本能的には Nethermere の野生児としての George に強くひかれている（それ故 Nethermere の森の中では Lettie は Leslie が

“real” な人に思われないのである) が、結局炭鉱経営者の息子 Leslie と結婚してしまう。この選択によって彼女が失う「何か」がある事に気づく場面では “snowdrops” の花が重要な役割を果たしている。¹⁰⁾

... (Lettie) “Look at all the snowdrops”—they hung in dim, strange flecks among the dusky leaves—“look at them—closed up, retreating, powerless. They belong to some knowledge we have lost, that I have lost and that I need. I feel afraid. They seem like something in fate...”

.....

“I believe I have lost something,” said she. (p.129)

Lettie が喪失した “some knowledge”, “something” について、彼女は何なのか答えられない。恐らく当時の作者自身も明確な形では答えられなかったであろうが、直観的に感じとっていたもの、それは “snowdrops” により象徴される自然が有する生命力の尊厳とでも称されるものであろう。それは Lettie が George に代表される世界、即ち Nethermere の生命的世界を拒み、Leslie に代表される Nethermere の外側の世界を選択した事により必然的に喪失さるべきものである。Lettie の運命に悲劇を見るとすれば、それは我々現代人自身の課題でもあり、ここにその因を見出す事ができる。

2) Nethermere の象徴的崩壊と Annable 及び Cyril

Nethermere の世界からの Cyril 達の離脱は、同時に Nethermere の自然——特に Saxton 一家の住む Strelley Mill 農場——の崩壊の過程と平行して進展している。Nethermere の自然の変化についての兆は、Cyril 達が青春を謳歌する第一部第五章 ‘The Scent of Blood’ の中に早くも現われている。小鳥達の “bright notes” は森の各所に仕掛けられた “traps” や “gin” に捕えられたウサギやハリネズミの “the cruel, pitiful crying” に代る。

(p.43) 次の章 ‘The Education of George’ では Strelley Mill 農場が野ウサギに荒らされ始める事が描かれる。これによって、Saxton 一家はいず

れ農場を手放して他の土地へ移住しなければならなくなる。この野ウサギの保護者として森番 Annable が登場してくる（第二部第一章）。

Annable は多くの批評家の注目を集めてはいるが、この人物のエピソードが主要な物語から逸脱しているとみるような G. Hough のごとき読み違いをさせるほど、¹¹⁾ 一見した所では物語の中心プロットの結びつきがわかり難い。だが、ロレンス自身が “He has to be there.” と強調したように、¹²⁾ この人物は Cyril 及び深層主題を解明する鍵である。Annable は “Do as th’ animals do.” (p. 131) を生活信条とするロレンス的人物であり、Lettie や Emily 達女性の登場人物には、“—tell a woman not to come in a wood till she can look at natural things—she might see something.” (p. 131) と忠告する。この “something” は、あの “snowdrops” の場面で、Lettie が喪失した “something” と同じものであろう。この様に Annable は女性に対して手厳しい。そして Cyril 達が初めて Annable に出会った時の、Annable に対する彼らの反応に注目してみよう。

“He seems to lack something,” said Emily.
 “I thought him rather fine fellow,” said I.
 “Splendidly built fellow, but callous——no soul,” remarked Leslie,
 ...
 “No,” assented Emily. “No soul—and among the snowdrops.”
 (pp. 131-2)

Cyril が “fine fellow” と好意的であるのに対して、Emily 達は “no soul” で “snowdrops” と同じ部類であるとみている。この Emily の指摘どおり、Annable は “snowdrops” に象徴される Nethermere の森の生命的世界の守護者なのである。

第二部第二章 ‘A Shadow in Spring’ は、この小説のほぼ中央にあって主題展開上の分岐点となっているが、この章の中で Annable が中心的に登場し “peacock” の場面が描かれる。この章は題名からして暗示的である。“with spring came trouble...” (p. 145) で始まり、Nethermere の「春」には

暖かい陽光ではなく、暗い「影」が射し込み始め、Nethermere の象徴的崩壊が暗示される。それはこの章の終りで Nethermere の森の守護者 Annable の不慮の死によって、決定的に暗示される事になる。

Annable と Cyril について考える場合、我々は Cyril の父親 Frank がどのように描かれているかを考えてみる必要がある。この小説では父親 Frank は具体的な登場人物としてはほとんど描かれておらず、第一部第四章 ‘The Father’ の中で妻 Mrs. Beardsall との生活の失敗、家出していた父の寂しい死が描かれているにすぎない。Cyril が父親の事を “vulgar”, “liar”, “mean” (p. 32) と汚い言葉を使っているように表面的には Frank に対する扱いは冷淡である。だが Frank の死に立ち会った人々の示す彼への同情、あるいは妻 Mrs. Beardsall が夫 Frank を冷酷に扱い過ぎた事への後悔等の中に、Cyril (ロレンス) の複雑で微妙な感情を読み取る事ができる。これは Annable に Cyril が何故ひかれるかを明らかにしてくれる。

He [Annable] treated me as an affectionate father treats a delicate son:... (p.146)

この一文からわかるように Cyril は Annable の中に自己の父親像を無意識的に見出している。これを考慮に入れた上で有名な “peacock” の場面を考えてみよう。

荒れ果てた教会の裏から Annable の足音に追いたてられて一羽の孔雀が飛び出して、誇らかにその美しい羽を広げる。それに向かって Annable は激しく罵倒する。

“The proud fool!—look at it! Perched on an angel, too, as if it were a pedestal for vanity. That’s the soul of a woman—or it’s the devil.”

.....

“That’s the very soul of a lady,” he said, “the very, very soul... I should like to wring its neck.”

Again the bird screamed, and shifted awkwardly on its legs; it seemed to stretch its beak at us in derision. Annable picked up a piece of sod and flung it at the bird, saying:

“Get out, you screeching devil! God!” he laughed... (p. 148)

この場面の直後 Annable は自己の過去を Cyril に語り始める。Annable はかつて牧師補であった当時、教養ある高慢な女性 Lady Crystabel との結婚生活に失敗した過去がある。Annable がこの場面で孔雀をこの女性に見立てて孔雀的な女性の “proud soul” を攻撃している事は明らかである。Cyril がこの場面で Annable と共犯関係にある事は “stretch its beak at us in derision” という語句からわかる。つまり、Cyril も孔雀に象徴される女性の特質に無意識的に反撥しているのである。そして Lady Crystabel と Lettie の共通性、彼女達に共通する “peacock” の象徴、これに対する Cyril の態度は、Nethermere に対する Cyril の反応を考える上で重要となる。

さて Cyril 達は大人に成長していくに従って Nethermere という母なる懐を離れていく。第三部第一章 ‘A New Start in Life’ は主題展開上第二の分岐点となっている。Lettie は Leslie と結婚して、George は Meg と結婚して、Nethermere を去り、Emily は学校に通うために Nethermere を出、Cyril はロンドンで生活する事になる。

... The long voyage in the quiet home was over; we had crossed the bright sea of our youth, ... It was time for us all to go, to leave the valley of Nethermere whose waters and whose woods were distilled in the essence of our veins. We were the children of the valley of Nethermere, a small nation with language and blood of our own, and to cast ourselves each one into separate exile was painful to us. (p. 234)

この Nethermere からの離脱、即ち人生の “new start” は Cyril にとって希望に満ちたものではなく、“painful” なものとなっている。ただ、この

Nethermere に対するもの悲しい感情は、若き日の作者の書簡が示しているように、恐らく作者の若者らしい生の感情が作品に投影されたものであって、作品のプロット展開に十分生かされているとは云えない。Cyril 自身どうしてロンドンで生活するようになったのか、何をロンドンでしているのか不明のままで、時々 Nethermere の故郷に帰っては失われたものへの感傷にふけるのである。成人した彼にとっての Nethermere とは次のようなものでしかない。

Nethermere even had changed. Nethermere was no longer a complete, wonderful little world that held us charmed inhabitants. It was a small, insignificant valley lost in the places of the earth. (p. 263)

もはや Nethermere の自然は Cyril を抱いてはくれず、"a small, insignificant valley" にすぎない。むしろ、少し後に描かれるように Cyril は Nethermere の自然が自分に敵意すら抱いているように感じている。

There was a wind running across Nethermere, and on the eager water blue and glistening grey shadows changed places swiftly. Along the shore the wild birds rose, flapping in expostulation as I passed, peewits mewling fiercely round my head, while two white swans lifted their glistening feathers till they looked like grand double water-lilies, laying back their orange beaks among the petals, and fronting me with haughty resentment, charging towards me intolently. (p. 302)

この場面でまず描かれているイメージを追ってみよう。"white swans", "peewits", "water-lilies", "water", いづれも女性的イメージである。そして "two white swans", "peewits" 達は Cyril に "fiercely" に "insolently" に "haughty" に挑んでいるようである。これは、あの Peacock の場面で Cyril が Annable と共に孔雀に抱いた反撥と同質のものである。ここでは Nethermere の母性に対する彼の無意識的反撥という形をとって

る。こうして小説の終り頃で Cyril は Nethermere を完全に築立っている。

I had done with the valley of Nethermere. The valley of Nethermere had cast me out many years before, while I had fondly believed it cherished me in memory. (p.303)

Cyril が Nethermere から完全に離脱したという事は、Cyril の内面における Nethermere の母性的イメージの崩壊を意味している。それは George という Nethermere の自然児の崩壊と呼応するものであった。

3) 結び——一つの主題解明へ

我々はこれまで Nethermere の自然のもつ意味、そして Nethermere 及びそこに関わる主要な登場人物 George, Lettie, Annable 達の運命、Nethermere に対する Cyril の態度の経緯、といったものを究明してきた。これらはいわばこの小説作品が生み出した幾つかの主題の糸といえよう。これらの考察の中から我々が感知できる作者が無意識的に描き出している深層の主題とは何であるのか。

さて、ロレンスはこの小説を書くにあたって Jessie Chambers に “The usual plan is to take two couples and develop their relationships.” と語ったという。¹³⁾ この言葉が事実であったとすれば、ロレンスの意図としては George—Lettie の関係と平行させて Cyril—Emily の関係を描くつもりであったと思われる。しかし完成した作品においては Cyril—Emily の関係は中途半端なままで終り、George—Lettie の関係も結局失敗に終わっている。Cyril—Emily の関係が進展しないままで終わっているのに対して、Cyril は一貫して George に対して愛情といってよい程の同情を示している。この事はロレンスがこの小説を執筆中の書簡の中で、“You are right, I value the friendship of man more than that of woman.”¹⁴⁾ と告白して、George の実際上のモデルとなった Alan chambers との “friendship” を強調している事と一致している。George と Cyril の関係がもっとも親密になった状

態を描く第二部第七章 ‘A Poem of Friendship’ における二人の水浴後に演じられる “towel-rubbing” の場面を引用してみよう。

He saw I had forgotten to continue my rubbing, and laughing he took hold of me and began to rub me briskly, as if I were a child, or rather, a woman he loved and did not fear...., he put his arm round me and pressed me against him, and the sweetness of the touch of our naked bodies one against the other was superb... and our love was perfect for a moment, more perfect than any love I have known since, either for man or woman. (p. 222)

この描写に見られる二人の “love” に同性愛的傾向があるのは否めない。¹⁵⁾ しかしここで重要な事は, “child” という語が使われているように Cyril は George の愛撫の中に自己の父親像を感じとっている点である。H. M. Daleski が鋭く指摘している事だが,¹⁶⁾ George が酒に溺れて自己を破滅させていく過程は, *Sons and Lovers* の中で描かれる Paul の父親 Morel の姿と類似している。こうして Cyril の父 Frank—Annable—George という一連の結びつきの中に我々はロレンスの父性的要素に対する感情を, そして Nethermere—peacock—Lettie という結びつきの中に母性的要素に対する複雑な感情を読みとる事が可能であると思う。当時のロレンスの立場を描いていると思われる Cyril は, この二つの要素(それは後に “dark” と “light” という明確な象徴の形をとってロレンスの幾つかの作品に登場してくるが)の間を微妙に揺れ動きながらも, 次第に Nethermere に代表される母性的要素 (light) から離反し独立しようとする方向を無意識的に求めている。ただ, この小説においては既に考察してきたように, George の破滅, Annable と Frank の死, そして Nethermere の象徴的崩壊, というようにいつれの要素も敗北する形になっている。この意味で, *The White Peacock* においては, Cyril (ロレンス) 自身が Nethermere—peacock に象徴される母性的要素から十分独立し得ていなかった, ないしは, まだその支配下にあったと考え

られる。Cyril が終始憂味な人物に留まっていた一因もここにあったのではあるまいか。

こうして Cyril が無意識的に求めた道程は（それは幾つかのイメージ、象徴を通して深層の主題を構成していたが）、続く *Sons and Lovers* の中で、Paul によって真の男性としての自我確立を目指す過程の中で、さらに徹底して追求されている。*The White Peacock* は、既に述べてきたように、種々の欠陥を備えた作品ではある。しかしながら、これまでの考察である程度まで明らかにし得たと思うのだが、作品自体としても十分評価に耐え得るものである。同時に、後に開花するロレンス芸術の特質をその技法面においても思想面においても含んでいる作品として重要なものであり、R. P. Draper とともに、これを “a remarkable first book” とみなすことは許されるであろう。¹⁷⁾

註) テキストは The Phoenix ed., *The White Peacock* (W. Heineman LTD) を使用した。

- 1) *The White Peacock* を作品論として詳しく分析しているのは Robert E. Gajdusek, ‘A Reading of *The White Peacock*’, *A D. H. L. Miscellany*. および Raney Stanford, ‘*The White Peacock*’, *The Novels of D. H. L. ; A Search for Integration* (Univ. of Missouri Press, 1971) ぐらいである。Gajdusek は主に作品形成の方法、象徴的表現に注目し、Stanford は精神的分析方法に基づいて、Cyril—Lettie の間に一種の incest love を認めようとする興味深い論を展開している。
- 2) 例えば、Cyril は登場人物でありながら、語り手でもあるため、George と Lettie の直接の話し合いの場面にも参加しているとき混乱が各所に見られる。
- 3) E. T., *A Personal Record* (London, 1935) p. 103.
- 4) 1914年のロレンスの書簡の中で、“symbolism” は “avoids the I and puts aside the egotist” という機能を有するために、“the whole” を把握し組織するのに適すると云った旨を述べている。(*Collected Letters, Vol. I*, p. 302)
- 5) Gajusek は Nethermere という語を分析し、neither=under, below の意味、プラス mère=仏語 mother, OE では pond, lake の意味、即ち “under the Mother” の意味だという。(*op. cit.*, p. 194)
- 6) *Collected Letters, Vol. I*, p. 27 及び p. 19.
- 7) *the visual imagination of D. H. L.* (London, 1971) p. 5.

- 8) この一種の「楽園喪失」のパターンは、*The Rainbow* の中でさらに雄大な構成をもって描かれている。ロレンスにとって、現代人の精神的墮落、そこから再生、新しき世界（楽園）への願望という方向は、彼の一生を通しての基本的なテーマであり、処女作にその萌芽を見出す事ができる。
- 9) 「月」がロレンスにとって重要な象徴的機能を持っている事はよく知られている。例えば *Sons and Lovers* の中で Paul を懐妊している Mrs. Morel が夫との争いの後に見る月 (pp. 23-25)。 *The Rainbow* における Anna と Will が稲束を月夜に集める有名な場面 (pp. 117-9)。あるいは Ursula と初恋の相手 Skrebensky の月下における破滅的な交わりを描く幾つかの場面。 *Women in Love* における 'Moony' 章の有名な場面。これらの場面において、「月」は大抵女性主人公の自我意識と一体化して男性の自我を破壊的に支配しようとする。
- 10) 「花」もまたロレンスの小説にあっては象徴的・祭儀的役割を果す事がよくある。 *Sons and Lovers* における「花」の象徴的機能については、Mark Spilka, *The Love Ethic.*, の精密な研究によって明らかにされている。 *The Rainbow* においては、Lydia の生への覚醒を促す役割を果すし、 *Women in Love* では Birkin と Ursula の間の一種の communion symbol となっている。いずれの場合も、「花」は自然界の生命的な力と結びついている事は明白である。
- 11) *The Dark Sun* (London, 1956) p. 30.
- 12) E. T., *op. cit.*, p. 117.
- 13) *Ibid*, p. 103.
- 14) *Collected Letters, Vol. I*, p. 22.
- 15) ロレンスが男対男の友愛的（同性愛的）関係に強い関心を抱いていた事は、J. M. Murry 等との伝記的事実を引き出すまでもなく、 *Women in Love* の Birkin と Gerald の関係を描いた時点から、強い関心の対象となり、一連の leadership novels を書いた事によって明白である。
- 16) *The Forked Flame*, (London, 1965) p. 313.
- 17) *D. H. Lawrence*, (New York, 1964) p. 33.